

南どんどん橋の話 小さな石柱から見えた昔

京王線の笹塚駅で下車して、高架の下の道を西へ向かって歩いていた時のこと。

高架の下を潜って甲州街道へ抜ける小道との交差点の角に、中途半端な高さの石柱が建っているのが気になって立ち止まった。自動販売機の横にある石柱は、周囲をコンクリートで固めて倒れないようにしてある。

何か意味ありげに感じて側面を見たら、人通りの多い面に刻字のための彫り下げが施されている。腰を下ろして、じっくり眺めてみると、彫られた文字は「南どんどん橋」と読み取ることができた。

ここに橋があったことを残しておこうという意図で、橋の袂の橋柱が保存されたものと思われる。



西の方から流れてきた玉川上水が曲折を繰り返しながらここへ来ると、南西から来て南東へと「へ」の字に大きく曲がる。そしてその昔、「へ」の頂点あたりに堰があり、蓄えられた水が音を立てて流れ落ちていたことから、

「どんどんの堰」と呼ばれていた。

現在の玉川上水は、この場所から上流100mほどの所(笹塚1丁目)で暗渠に入り笹塚駅の下を流れて行く。

笹塚1丁目の川の流れが露出している区間は、桜の古木があり花の季節には素晴らしい散歩道になる。

流れは笹塚駅の南東部で再び姿を表わすが、またすぐに暗渠に入ってしまう。

1653年から1654年にかけて、多摩川沿いの農民清右衛門・庄右衛門の兄弟が指揮を執って、多摩川の水を江戸市中に導く玉川上水を開削した。

当初は日野を取水口とする計画だったが、土質の関係で失敗に終り福生に変更。しかしこれも岩盤の関係で失敗に終り、最終的には羽村が選ばれて開通に漕ぎ着けた。羽村からゴールの四谷(大木戸)の水番所までの距離は約43Km、高低差は92.3m、ここから江戸市中に配水されていた。

この大工事が評価されて、二人に「玉川」という姓が授けられ、後の世で「玉川兄弟」と言われることになった。

江戸の上水道は玉川上水の他に、1590年(天正18年)に徳川家康の命をうけて、大久保藤五郎によって開かれた神田上水がある。神田上水は、井の頭池(井の頭公園)を水源として小石川の関口までのもので、のちに善福寺川・妙正寺川等を補助水源として、玉川上水からの分流も接続されて、江戸の上水システムとなった。文京区にある関口という地名はもとより、杉並区の関根・練馬区の関町などは、「堰」から転じた地名と言われている。

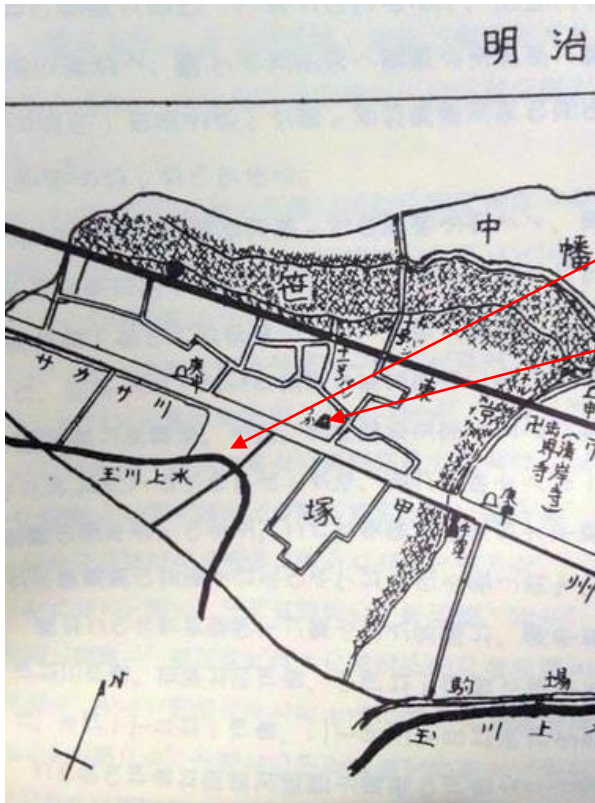
玉川上水は、取水口からしばらくは多摩川と並走して南東に流れた後、拝島駅の東側で方向を変えて東に向かう。西武拝島線と並走して玉川上水駅の南側で、線路から離れて南東に向きを変える。

その後しばらくは真っ直ぐに流れた後、花小金井で東に向きを変えるが、小金井公園の東端で再び南東に変えて、三鷹駅の下を流れて井の頭自然園に入る。そして曲折を繰り返しながら南に流れて、中央自動車道の高井戸ICの下で、高速道路の下に潜ってしまう。

流れが再び顔を出すのは代田橋駅の北側で、ここから南に流れて京王線の南側に進み、前述の笹塚駅の真下

に辿り着く。三鷹市牟礼に「どんどん橋」があるので、ここでは「南どんどん橋」となったのだろうか。「ドンドンの堰」と言う名の堰は各地に存在するので、昔の人は堰を落ちる水の音をこのように聴き取ったのかもしれない。

インターネットで関係する情報を探していたら、「おかしの笹塚」というブログを公開している方がいた。貴重な昔の笹塚の画像が載せられており、興味深い内容のブログだった。その中から二枚の写真をお借りした。



一枚目の画像（上の写真）は、明治時代の地図で、まだ京王線が走っていない頃のものと思われる。甲州街道の南側に、曲がりくねって流れる玉川上水が描かれている。また甲州街道に、「つか」という表記がある。これは「笹塚」という地名の由来となった一里塚とのこと。

玉川上水と南どんどん橋 つか（笹塚）

二枚目の画像（下の写真）は、大正時代の「南どんどん橋」の景色で、川の畔に家が建ち、木橋の上に10数人の子ども達が写っている。女の子は浴衣を着ていて、男の子は上半身が裸なので、季節は夏のようなのである。川遊びでもしていたのだろうか。

私の甥は昭和40年生まれ、北沢で生まれて笹塚で育った生粋の地元っ子。彼の弁によれば、子どもの頃にいつも紙芝居屋が来ていた所だったそうだ。

以上

